様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３０日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19320026
研究課題名（和文）　模倣の意味と機能―写す・抜き出す・変容させる

研究課題名（英文）　The study on meaning and function of imitation:Copy/Extraction/Alteration

研究代表者　根立　研介
（NEDACHI KENSUKE）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10303794

研究成果の概要（和文）：　本研究では、日本・東洋及び西洋で行われていた美術作品の制作における模倣について、作品調査及び関連資料の分析に基づき個別事例を精査するとともに、比較研究の視点を交えつつ、各々に関して同時代の宗教観、政治的文脈、社会状況等に照らして詳細な考察を行った。その結果、美術における模倣が単なる写すという行為に留まらず、模倣という概念が変容しより多義的な意味を持っていたことを明らかにし、本領域において指標的な役割を果たしうる包括的な成果を得た。

研究成果の概要（英文）：　This research was a detailed examination of imitations of art objects in the East/Japan as well as the West, based on analysis of related materials and investigation of objects, together with close inspection of individual examples and including comparative research, also shedding light on religious outlooks, political contexts, and societal conditions during the period. Not settling for the act of merely tracing art copies, I also clarified the multiplicity of meanings that resulted from the transformation of the concept of “imitation”. I obtained comprehensive results that can perform a barometer-like role in this field.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１９年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
平成２０年度	3,100,000	930,000	4,030,000
平成２１年度	3,100,000	930,000	4,030,000
平成２２年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
総　計	14,800,000	4,440,000	19,240,000

研究分野：美術史学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：模倣、模写、型、古典学習、規範

１．研究開始当初の背景

美術における模倣は、ある意味きわめて一般的な事象である。洋の東西を問わず、美術作品の制作者たちは、先行作例、殊に古典と呼ばれる名品を克明に写すことを基礎的学習としてきた。また、優れた造形性や宗教的な霊性など、何らかの価値を有する作品を克明に写して模本や模造が制作されることも、一般によく認められる現象である。

しかしながら、こうした対象を単に写し取るような模倣は、一種の複製制作と言え、いわば模倣の第一段階と言える。しかしながら、美術を取り巻く造形活動においては、こうした模倣と意味がかなり異なるものも認めら

れる。日本彫刻史研究に関連して言えば、模倣の意味は、どうも形や様式の類似といった問題には留まらず、一種の霊性あるいは霊的なイメージの伝達といった問題にも展開するようである。すなわち、仏像の本体やそれを荘厳する様々な装置に一種のキーワードとなる細部表現が隠されており、このキーワードさえ表現されていれば、本来は模倣の対象となるはず部分の形が変容しようとも、むしろ本体に付属するものの方が重要視され、条件が満たされれば、新たに造り出されたものは源像を模倣しているとみなされる場合も発生していたようである。

このように、模倣の意味は多義的であり、模倣の意味と機能を解明するためには、従来想定されていた模倣の概念の枠組みを一度取り外し、新たな視点から模倣の問題を考察することの必要性が強く感じられ、本研究を開始した。

２．研究の目的

美術における模倣は、ある意味きわめて一般的な事象である。美術作品の制作の場では、自然を写すことや、先人たちの作品を写すことは、美術の学習として頻繁に行われてきた。「模」の字義は型であり、手本であり、洋の東西を問わず、美術作品の制作者たちは、先行作例、殊に古典と呼ばれる名品を克明に写すことを基礎的学習としてきた。そして、こうした模倣を通して古典学習を積み重ねた芸術家たちが、しばしば新たな創造を成し遂げたのも事実である。また、優れた造形性や宗教的な霊性など、何らかの価値を有する作品を克明に写して模本や模造が制作されることも、一般によく認められる現象である。しかしながら、模倣は、対象となる美術品を単に写すと言うことだけではなく、対象からある表現上のエッセンスを抜き出し、それを創造の源泉として活用すること、さらには模倣の対象となるものとそれに基づき造り出されたものの間には表現上の類似性がほとんど認められないのに、ある種のキーワードとなる表現、さらには両者を規定する概念の存在を見いだせれば、模倣という行為が行われたと認識される場合さえある。こうした美術にかかわる現象は、洋の東西を問わず発生しており、模倣には従来の概念では語り尽くせない様々な形態があることが分かりる。このような、いわば模倣の概念の拡大といった現象が何故発生してきたかを解明するためには、改めて模倣の意味や機能そのものを問い直す必要性があろう。本研究は、日本彫刻史・絵画史・工芸史、オランダ・ドイツ・イタリア絵画史などを専門とする東西美術史の様々なジャンルの研究者が集い、個別研究テーマについて模倣の基礎的な概念の確認作業を行うとともに、研究会・調査等の共同研究を実施して意見交換を行いながら、模倣に纏わる様々な事例を再検討することにより、その解明を試みることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者である根立が所属する京都大学文学研究科を拠点として遂行された。根立は、各研究分担者と密接に連絡を取り、各人が担当する個別研究の進捗状況を把握して、研究スケジュールや予算の使用などに関する全体の調整役を務めた。

本研究の基礎となるのは、それぞれが設定した個別研究であるが、テーマとなる地域、時代、ジャンルによって三班に分けることとした。班分けは、第１班は、根立、武笠、皿井の古代・中世の日本彫刻史研究を専門とする者たちで構成され、それぞれのテーマの研究を進展させながら、最終的には日本及び東アジア諸国における霊験像の模刻の問題などを研究対象とした。第２班は、田島、宮崎、中尾の日本の近世から近代に至る絵画及び工芸を専門とする者たちから構成され、琳派を中心にこの時期における各流派の模倣の問題を取り扱った。第３班は、中村、平川、深谷、劔持の四人の西洋美術史研究者からなるグループで、主にルネッサンスからバロック期の西洋美術史における模倣の問題を取り扱った。

研究代表者及び各分担者、連携研究者は、自らの設定テーマの研究を行う一方で、班内の構成員と議論を積み重ねて研究の精度を高め、さらに年２回程度の全体研究会で研究の成果を発表し、それを共有するようにした。そして、最終的に各研究者の研究成果を取り纏め、その成果を納めた論文を掲載した報告書を刊行した。

４．研究成果

上記の班分けに即して、本研究の成果を述べる。

（１）（第１班）

この班の中心テーマとして「霊験像の模刻をめぐる考察」が挙げられ、これについて長谷寺式十一面観音像、善光寺式阿弥陀三尊像、法隆寺金堂阿弥陀三尊像などの模倣の問題を検討していった。

①根立研介は、霊験仏の模倣概念の変容を明らかにした。霊験仏の模倣は、対象の形姿を単純に写し取るものだけではなく、印相など、教理上の特徴を一部抜き出して、それを再現すれば、例え形姿に類似性がさほど無くとも模倣が成立するといった模倣概念が日本中世には成立していたことをまず明らかにした。さらに、形姿の類似性が対象となる霊験仏とさほど認められないものでも、霊験仏に

纏わる納入品を像内に納めるなど、理念上の共通性を有すれば、模倣が成り立つという模倣概念まで日本中世には成立していたことを明らかにした。このことは、日本における模倣概念が大きく拡大し、模倣が単に形の問題ではなく、一種の理念の問題ともなっていたことを明らかにした。

②武笠朗は、法隆寺金堂阿弥陀三尊像の模倣のあり方を論じ、形式的には同じ堂内の薬師如来像と伝薬師如来脇侍像の模倣を行っていながらも、源像の様式を捨象した模古作になっていったことを明らかにした。こうした模倣のあり方は、美術の模倣にはしばしば認められるが、この場合、模倣の背後に聖徳太子信仰や霊験仏・善光寺式三尊像が複雑に絡んでいたことを指摘している点は甚だ興味が持たれた。

以上、この研究班では、日本の仏教彫刻の模倣における概念の変容と多様性を明らかにする大きな研究成果を得た。

（２）（第２班）

この班の本研究の成果は、江戸後期から近代日本の琳派受容者に認められる模倣に新たな見解を呈示したことである。

③宮崎ももは、江戸琳派の酒井抱一の仏画制作の模倣の問題を取り上げた。抱一の古画に基づいた仏画は、抱一自身やその周辺における古画・古物への愛好、古の尊像の姿が求められる時代の傾向を反映し、古画を作品に取り入れたものが数多く制作されたが、その取り入れ方を見ると、ただ図像の形として写すだけではなく、質の高い綿密な描写を得ることを意図し、鑑賞の場において人目を惹く美しさや趣向を加えていることが特徴の一つとして挙げられ、イベント化した宗教行事にふさわしい華やかさを備えている点が大きな魅力であることを指摘した。こうした古画の模倣も、源画の単純な模倣ではなく、画家自身の意図や受容者の意向による一種の変容した模倣であり、こうした模倣のあり方が江戸後期の琳派に認められることを明らかにした点は注目される。

④中尾優衣は、近代の図案家として琳派を継承した神坂雪佳の琳派受容のあり方を研究した。雪佳の琳派受容は、従来は師である岸光景からの影響と漠然と捉えられてきたところがあるが、これを再検討している。その結果、雪佳の琳派受容は当時もてはやされていた光琳というよりも光悦を中心とする琳派の諸作品を実際に学習することによって成り立っており、大和絵の要素を感じさせる、優美な愛らしささえただよう雪佳の作風は、雪佳自身の熱心な古典美術研究の成果として醸成された新しい琳派の表現であるとした。ここで論じられたのは、芸術家が新たな創造を行う際にしばしば認められる模倣を伴う古典研究の重要性の問題である。中尾の研究は、この問題を近代日本の琳派受容を通してこれを明らかにしたのである。

（３）（第３班）

この班の研究は、主にルネッサンスからバロック期の西洋美術史における模倣の問題を取り扱うもので、四つの成果を得ることができた。

⑤中村俊春は、西洋における模写、特に１７世紀のネーデルラントの事例を中心にこの問題を取り扱った。中村は、絵画学習における模写の重要性も示唆したが、特に検討を加えたのは、工房内で商品として制作された絵画において、画家の自筆作品と工房模写の社会的な評価の問題である。この検討を踏まえて、当時、模写が今日のように創造性を欠いた否定的評価の対象と必ずしもなっていなかった事実を明らかにした。しかしながら、こうした模写に対して、懐疑的な評価を下す動きも一部登場しだし、このような動向が今日の我々の模写評価にも繋がっていくことを示唆した。西洋近世絵画史における模写の重要性を改めて顕在化する試みとして評価されよう。

⑥平川佳世は、１６世紀前半に活躍したネーデルラントの画家、ファン・ヘームスケルクの《ヘレネーの略奪》に検討を加えて、著名な古代建造物の定型表現が継承されつつも、刷新され、北方の世界風景と融合して「古代風景画」という新たなる絵画ジャンルを生み出すに至る過程を論じた。すなわち、１５世紀以来記号化した古代建造物の表象を継承しつつも、当時胎動していた風景表現に関する様々な関心でそれを刷新し、さらに「古代世界の七つの驚異」を描き込むという独自の創意によって古代世界全体の広がりを示す全く新しい表現をファン・ヘームスケルクが生み出したことを明らかにしたのである。この研究は、いわゆる創造的な模倣に関わる西洋美術史の一研究として評価されよう。

⑦深谷訓子は、１７世紀ネーデルラントのカラヴァジェスト、テル・ブリュッヘンのカラヴァッジョ作品の模倣に関して新見解を発表した。すなわち、テル・ブリュッヘンのカラヴァッジョ作品の模倣と変容は、いわば学習の過程であると同時に、自分ならではの咀嚼の仕方を示すものであったと考えられるとした。そして、同時期のカラヴァジェストによる模倣のあり方の多くも、大勢の人間が同じ参照源を吸収するなかで、それぞれに自分なりの吸収の仕方を示すという、同化と再解釈の提示を同時に行う過程だったと見ることができることを指摘した。この研究も、いわゆる創造的な模倣にかかわるものであり、このことがカラヴァジスムの問題にも適用できることを我々に知らしめてくれた。

⑧劔持あずさは、イタリア・ルネッサンスの画家、フィリッポ・リッピの聖母子像を中心

に、模倣という行為が、新たな作品を生み出す過程で果たした役割を検討した。ここでは、リッピの模倣者が、原画の主要部を抜き出し、再編集してコピー作品をつくるという模倣行為をまず取り上げ、コピー作品が原作と異なる魅力を持つ場合をまず確認した。さらに、興味深いのは、こうしたコピー作品の魅力がリッピに新しい着想を与え新たな絵画を制作する発想源になった事実を指摘した点である。また、リッピの次世代の画家たちもリッピ作品の構図などを模倣しながらも、より洗練された作品を生み出していく過程を明らかにした。ここでは、模倣という行為が、造形活動の中で積極的な役割を果たしていたことが改めて明らかにされたが、コピー作品の魅力に原作者が反応したとすれば、模倣行為を通じての影響の流れは必ずしも一方向でないことになり、模倣とのあり方の多様性を如実に示してくれた。

以上が本研究成果の概要である。本研究は、洋の東西を問わず美術における模倣は多義的で、それを明らかにすることにより模倣の意味と機能を解明することであった。これらの研究成果は、そうした模倣の意味と機能の多様性に纏わる問題を顕在化し、この問題の解明に一定の役割を果たすことができたとして評価される。なお、以上の研究成果を詳細に世に公表すべく、２０１１年３月、論文８本を収録した、平成１９―２２年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）研究成果報告書『模倣の意味と機能―写す・抜き出す・変容させる』を刊行した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３４件）
①皿井舞、神護寺薬師如来像の史的考察、美術研究、査読無、４０３号、２０１１、１－２４
②根立研介、霊験仏と納入仏を通した聖性移植をめぐって、美術フォーラム２１、査読有、２２号、２０１０、４６－５０
③武笠朗、善光寺仏の造像と霊験性、美術フォーラム２１、査読有、２２号、２０１０、５６－６０
④中村俊春、《ファン・ロイエン花鳥画》の作者再考、京都美学美術史学、査読有、９号、２０１０、２０５－２２５
⑤平川佳世、つかのまと不朽の間―プロヅイーノ《幸福の寓意》―、京都美学美術史学、査読有、９号、２０１０、１－３４
⑥深谷訓子、１７世紀の美術文献における版画論の展開、尾道大学芸術文化学部紀要、査読無、９号、２０１０、１１７－１２４
⑦劔持あずさ、岩山が示すもの―フィリッポ・リッピ《聖母子と二人の天使》の背景をめぐって、近畿大学文芸学部論集「文学・芸術・文化」、査読有、２２－１号、２０１０、１８３－２０８
⑧根立研介、日本の肖像彫刻と遺骨崇拝、死生学研究、査読無、１１号、２００９、５７－８２
⑨武笠朗、善光寺信仰とその造像をめぐって、佛教藝術、査読有、３０７号、２００９年、３５－４９
⑩平川佳世、銅板油彩画の誕生をめぐって、京都美学美術史学、査読有、８号、２００９、１－３１
⑪根立研介、定朝をめぐる二、三の問題―僧綱位授与の問題を中心にして―、鳳翔学報、査読有、４号、２００８年、１３－３１
⑫中尾優衣、蒔絵技法から伏彩色螺鈿技法への移行―１９世紀前半における〈長崎青貝細工〉の制作について」、CROSS SECTIONS(京都国立近代美術館研究論集)、査読有、１号、２００８年、２８－４５
⑬根立研介、院政期　興福寺にかかわる大仏師をめぐる補論、佛教藝術、査読有、２９６号、２００８年、５７－７２
⑭根立研介、彫刻史における和様の展開と継承をめぐって、哲學研究、査読有、５８３号、２００７年、１－２４
⑮中村俊春、自立への苦闘―若きヴァン・ダイクとルーベンス―、西洋美術研究、査読有、２００７年、１５８－１８４
⑯田島達也、美人画に見る京美人、美術フォーラム２１、査読有、１５号、２００７、１００－１０３

〔学会発表〕（計６件）
①劔持あずさ、フィリッポ・リッピの描いた岩山をめぐる一考察、美術史学会西支部例会、九州大学、２０１１年1月２２日
②皿井舞、神護寺薬師如来像の造像背景、日本綜合仏教研究会第９回大会、駒澤大学、２０１０年１２月１２日
③根立研介、運慶と中国美術の受容、東方学会第６０回全国会員総会、芝蘭会館、２０１０年１１月６日
④深谷訓子、ヤン・ファン・スコーレル作《エルサレム巡礼者たちの肖像画》考察、広島芸術学会第２４回大会、広島県立美術館、２０１０年７月２４日
⑤平川佳世、銅版油彩画の誕生をめぐって、第７回京都美学美術史学研究会大会、京都大学、２００８年１２月１３日
⑥根立研介、仏師論から見た日本彫刻史の時代区分、第５２回国際東方学者会議、日本教育会館、２００７年5月１８日

〔図書〕（計４３件）

①根立研介・中村俊春・平川佳世・武笠朗・深谷訓子・劔持あずさ・宮崎もも・中尾優衣、根立研介、模倣の意味と機能―写す・抜き出す・変容させる（平成１９―２２年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）研究成果報告書)、２０１１、全１６９
②根立研介他、思文閣出版、仁明朝史の研究、２０１１、２３９－２６１
③根立研介、ミネルヴァ書房、『ミネルヴァ日本評伝選　運慶―天下復タ彫刻ナシ―』、２００９年、全２２８
④ Kayo Hirakawa 、 Peter Lang, “ The Pictorialization of Dürer’s Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries”、２０１１、全１７８
⑤中村俊春・根立研介・平川佳世・深谷訓子・劔持あずさ他、中村俊春、『前近代における「つかのまの展示」研究』（平成１７―２０年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）研究成果報告書)、２００９、３３－４６・７７－９４・１１９－１４８・１４９－１７４・１７５－２００

６．研究組織
(1)研究代表者
根立　研介（NEDACHI KENSUKE)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：100303794

(2)研究分担者
中村　俊春（NAKAMURA TOSHIHARU)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：60198223
平川　佳世(HIRAKAWA KAYO)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10340762

(3)連携研究者
武笠　朗（MUKASA AKIRA)
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号：30219844
田島　達也(TAJIMA TATSUYA)
京都市立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：40291992
深谷　訓子(FUKAYA MICHIKO)
尾道大学・芸術文化学部・准教授
研究者番号：30433379
劔持　あずさ（KENMOCHI AZUSA)
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：40548939
皿井　舞(SARAI MAI)
国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部・研究員
研究者番号：80392546
宮崎　もも(MIYAZAKI MOMO)
大和文華館・学芸部員
研究者番号：10416266
中尾　優衣(NAKAO YUI)
国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・研究員
研究者番号：00443466